明治三十一年十二月二十六日郵信省第三種郵便物認可
第五十六號、毎月二回(一日、十五日發行)
明治三十四年六月一日發兒

改教時報

社說
◉女子教育……安達憲忠
論說
◉勤儉貯蓄
◉感化院の設備……
雜錄
◉伯林通信 日本花祭……(在伯林)文學士 近角常觀
信眾
◉不諍の心……文學士 清澤滿之
令昔
◉新山吹譚(承前)……文學士 甲南生
社會
◉現在の政界◉社會民主黨の禁止◉大菩提會の窮境◉四恩瓜生會◉銅像除幕式
◉教界彙報

第五十六號

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
五、公認教制度を調査すること。
六、社會問題を講究して慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
十一、殖民傳道を奬勵する事。
十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講する事。

○政教時報第五十五號目次

社說
◎反省自覺の時機……（安藤鐵腸）
論說
◎實行難……（在伯林）（近角文學士）
雜錄
◎西教事情（其六）……（本多文學士）
信眞
◎善を嘉みし惡を惡むの情……（文學士甲南生）
令音
◎新山吹譚（承前）……
社會
◎伊藤內閣の瓦解等

本誌廣告

一、本誌は毎月二回（一日、十五日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれは御注文に應せず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地
發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十四年五月廿一日印刷
明治三十四年六月一日發行
發行兼編輯人 百目木智雄
印刷人 清水朝太郎

政教時報

女子教育

女子教育が我國現今の社會に於て、就中佛教界に於て必要なことは我輩の屢〻唱道した所である、又いくらかは世人も氣が付たらしく思へる節もある、夫は今日の如く經濟界紊亂の極點に達して、恐慌の波動は日本全國を凄まじい勢ひで渦卷いて居て、紳士紳商と威張て居る連中も、平生己は大政治家なりと肩で風切て國民を睥睨したる高位顯爵先生も、皆共に青息吹いて腰拔かして居るにも拘らず、婦人社會は中々景氣が宜ろしい、男子の事業は皆悄然として生氣を失ひ、所謂氣息淹々として局面展開に苦心して居るに引換へて、女子の仕事は皆割合に秩序正しく成効しつゝある、從來あらゆる帝國婦人協會、帝國婦人教育會、婦人衛生會等の諸會は皆其大會は從來よりも盛で有た、婦人慈善演藝會の如きは、婦人が男子の事業に手を出して助けたので有て、ソシテ中々盛大で大層利益が有たソーな、出版物に付ていふも、大日本女學會の女學講義錄の發行高は驚く程である、又「女學世界」「をんな」「家庭」などいふ雜誌は本年に入て發刊せられ、從來の普通の雜誌にも家庭とか何とかいふ婦女向の欄を新設せられる、女子大學は先年來の繼續事業であるけれども今年に入て成就した、瓜生會の瓜生刀自の銅像も先月出來上つた、愛國婦人會も本年貴婦人に依て發會せられた、以て何となく婦女社會の景氣付いて居る事が分る、潮流は恐ろしいもので、時勢に後れ勝と評せらるゝ所の佛教者内にも、矢張雜誌も發行せられ、女學校も建てられ、四恩瓜生會の如きは大に活氣を增し、東亞佛教會の女子部も出來て、奮發し出した、眞宗などには坊守教誨なども始まつた、併しながらまだ〳〵佛教社會は婦女に勢力が無く、又婦女に對する注意が頗る薄い、女子の教育は諸事業中に於て最後れて居る、全國に於て佛教主義の女學校を校へ擧げて見た所で幾校あるであらう、何百萬と云ふ信徒を有して居る佛教者が建てゝ居る女學校の數は、僅か十萬か十一萬より無い耶蘇教徒の手に成る女學校よりも數が少いと云ふ有樣では無いか、夫で自然の結果として佛教の女子は誠に社會に勢力が少い、婦人の會などは婦人矯風會の如き耶蘇教取り切りの會は別であるが、多くは會員は佛教信者か左もなくとも、寧ろ佛教の方に同情を有する人が多いにも關らず、其會の幹部となりて働く人は、耶蘇教徒に多い、例せば赤十字社である、當今社員は七十萬人の多きに上て居るといふ、其社員は、隨分澤山に無宗教者もあるに違ひ無いが、宗教信者に就て言へば、佛教信者の多い事は勿論であるが、一度赤十字社病院に往て見るが宜ろしい、看護婦の上の位置に居る者は、樹ね耶蘇教信者である、夫等は仔細に取調べて見たならば種々の原因や事情も有うけれども、大體には佛教界には女子教育が等閑にして措かれたから起た事と申して差支ありますまい、是は何程洪量を以て考へても、決して善い事

なら何人がして呉れても善いはと濟まして居る場合では有りますまい、又一方に於ては多少智識あり教育ある妻を娶らんとするには、兎角耶蘇教臭味の女子が多くて困るといふことは我々が度々耳にした事である、是等諸種の點から考へて見ると、ドーしても佛教者は女子教育に對して注意し奮發せねばなるまい、若し今日に於て一奮發して女子教育に對する面目を改めぬ時には、佛教者は佛教徒を娶らうと思へば、才學の劣りた者を娶らねばならず、又才學を欲すれば無宗教者か若くは耶蘇教徒を娶らねばならぬ、コーいふヂレンマに掛て妻を娶る時は其家庭は餘程案じられる次第である、依て我輩は佛教界は今目を醒して女子教育に力を入れることを切に勸告するのである、近來佛教界は言論は萎靡して振はないといふでも無いけれど、兎角空論が多くて、親切なる示導となるべき言説は少い樣である、佛教者の事業も全く寂寞聞ゆるなしと言ふ程でも無いが、やれ佛骨拜瞻式とか、やれ三百年紀念法要とかと言て、兎角浮華なる御祭り騒ぎが多くて、眞摯なる宗教家らしい事業は誠に少い樣に思へる、教育事業などいふものは、一朝一夕に効果の見ゐる派出な仕事では無いで、容易に目には立たぬが、其代り忍耐して從事すれば、必其効は空しからぬものであるから、眞面目に女子教育に從事して貰ひ度い、一朝一夕には効果が擧らぬ事業であるから、猶更一日も早く注意を向けて貰ひ度い、既に今でも遲れてるのである、猶此上躊躇して一日後るれば一日丈け多く損があるから、敢て佛教界を示導するなどゝ不遜な言葉は申さぬけれど、女子教育は目下の急務なることを訴へて以て世の注意を惹起し度いと思ひます、

勤儉貯蓄

兎角戰爭の後は經濟上の困難に遇ひ易いものである、古來の歴史に徵するも、戰爭後財政經濟の厄難に罹ら無た例は僅有絶無と申しても宜しい、シテ又不思議な事には戰敗國よりも却て戰勝國の方が此祟を受け易いのである、之を思ふと人間は弱い者で有て、奢侈には流れ易いものである、明治二十七八年の日清戰役は、東洋の大變亂で有て、戰敗者たる清國が爾來財政の困難を來した事は勿論であるが、我日本も隨分手痛い創痍を蒙りて、今日の經濟界の亂調は言ふに忍びない樣な有樣で、昨日も會社の解散今日も銀行の破綻、毎日の新紙は經濟界の恐慌騒ぎて大部分を占めて居る、伊藤内閣が倒れたのも財政困難の爲である、其後最早一ヶ月にもなるのに後繼内閣の組織が未だに出來ぬのも、財政政策が確立せられず大藏大臣に人を得ないといふよりも來る現象である、是等は皆戰後經營といふ名の下に馬鹿に軍備を擴張したのが大原因で此有樣に陷たのである、然るに其後政治家も經濟當局者も稍眼識の有る者は、經濟事情が逆境に在ることは全く氣付かぬでも無いが、先づ償金などで遣繰算段をして、姑息的縫的に其日暮しをして居たのが、北清事件が起てから愈窮境に陷りて最早遣繰算段も付か無くなつたのが現今の狀態である、今日所謂政治家等を責れば幾らも責むる理由はあるけれど、責めたとて仕方が無い、唯政治經濟の局に當り來りたる者は此際猥りに責任を遁れずして善後の策を講ずるが宜しい、併し是等の政治的經濟的方面は暫く措き我輩は國民として國民の分を守りて、社會的方面の救濟策を立てんか、要するに勤儉貯蓄を唱道するよりは外無い、これ固より名論奇策にはあらずして古來何人も言説する所である、併しこの珍しからぬ尋常普通の説が最間違の無い眞理のある方策である、松方井上等の諸老が此説を主張せらるゝは、是を政論とし之を經濟政策としては上乘であるか否かは議論も有うが、之を社會的方面より見れば決して間然すべき所の無い確説である、苟も東洋の覇權を握らうと思ふなら、こんな貧乏國では仕方がない、こんな經濟界の危險な事で、二十萬噸の軍艦十三師團の陸軍が有た所で何の役に立つであらう、如何に忠勇なる兵士も喰はずして働く譯には行かないから、一番國民が大覺悟をなし腐を堅めて掛らねばならぬ秋である、

然るに我國民は頗年不景氣不景氣と口にはこぼして居ながら、益〻遊惰に傾き愈奢侈が增長する、夫は輸出入表でも一瞥すれば直に明なことで、年々輸入が超過するのは、精製したる奢侈品の輸入が增加するからである、縮緬とか砂糖とか懷中時計とかいふ樣な從來より輸入する奢侈品が增加するのみならず、婦人の肩掛等の如き新奇輸入品の種類が增加する、輸入超過も農産物や粗製品なら驚かないが、夫が皆奢侈品である、半期や一年の輸入超過なら悲まないが、已に數年打續いてである、夫も國民の貯蓄が增し、購買者が高まり、内地も富有であるのなら結構であるが、國民貯蓄心は少しも增進せず内地の事情は現在人の知る如くである、不吉の言辭を發し度くないが、是では御世辭にも、國家隆運に赴く吉兆だとは言へぬではないか、其上國民の元氣を鼓舞する所の宗教は萎靡振はない、長大息すべしとはこんな場合に遣ふべき言葉で有らう、政治上經濟上の救濟策の善し悪しに關らず、國民が勤勉し節約して貯蓄した金は國家社會を富すに違ひないから、我輩は何處までも勤儉貯蓄主義を皷吹する覺悟で居る、今日に當て我國民は强兵といふ二字と共に瞬時も忘れてならぬのは富國といふ二字である、世界へ押出して世界的日本人となり、東洋の覇權を握らうとするには、是非共此覺悟が必要である、

論説

感化院の設備に就て

東京市養育院幹事　安達憲忠

曩に常盤文學士より各地方に於ける感化院創設者の便に供せんが爲に、收容者凡三十人を基礎として、設備費及經常費の概算を作りてよとの依囑あり、取敢へず愚見を記して送れり。政教時報の五十三號に掲載せられたるもの是なり。誠に漠然たる概算にて實際に至りては相違の點も多かるべし。兎も角

此事たる事實上の問題にして、創設者に取りては猶注意を加ふべきもの多きを以て、今該設備に對する二三の心付きたる廉々を述べて、前の不足を補ひ以て各地有志者の參考に供せんと欲す。

左りながら爰に一言し置かざるべからざるは、予は未だ斯る事柄に就て、物知り顔に云々すべき程の資格なきものなると是なり予は東京市養育院の一部に昨年七月感化部を設置せられて以降僅々十ヶ月ばかり之に關かり居るのみにて、未だ該事業上の經驗もなく、又固より感化上に關する知識もなく、唯日々に種々の事柄に付て困難を感じつゝあるのみなれば、未だ此事業につき自己の考案を他に向て述る事の出來る次第にはあらず。左りながら感化事業は本邦にありては尚創始に屬する事(一二之あるも)にて、經驗ある人とても少きを以て知らぬ乍らも一日の長あるの次第により、困難を感じたる點丈をも述べて、先の經費概算に對する不足の點に辨明を爲すは、あながち無用の事にあらざるべしと信ずるなり。

感化事業には、先づ第一に如何なる種類の者を收容するかを定めたる上にて、其設備を爲さゞるべからざるは、尤も注意すべき事なり。何となれば其種類に依りては、種々の必要なる設備なかるべからず、若し漫然其種類を定めずして設備を爲し、種々の者を收容したらんには他日其家屋の構造或は取締上は勿論引て感化上にも非常なる困難を見る事あるべければなり。又種類に依りては、設備費の上にも通常經費の上にも、大なる關係あるべきなり。其種類とは凡そ左の如くなるべし。

第一、男子歟女子歟。

第二、年齢は何歳より何歳までか。

第三、浮浪の徒のみ入るゝ歟、又は父母或は家庭ある者も不良の者は之を收容すべき歟。

第四、未犯罪者に限る歟、犯罪者も收容すべき歟。

政府の發布せられたる感化法には、唯八年より十六年までの者を收容する事となり居れども、實際の設備を爲すには、年齢以外に前に記したる種類を定めて掛らざれば、非常の困難に陥るべし。歐米にても犯罪に陥りたるものと、未犯罪者とは何れも別院に收容すと聞く。若し之を別たずんば到底其繁に堪へざるべし。公設事業として設立するものならば、費用を租稅に仰ぐべきを以て內部の組織さへ完全にする時は、如何なる種類を收容するも、皆夫々の方法を設くるを得べきも、私立にして費用に限りあるものならんには、先收容すべき種類を確定したる後に於て、初て之が設備に從事すべきなり。曩きに概算を立たるものは。八才以上十三才未滿の未犯罪男兒のみを收容すべき考より打算せしものなり。

滿十三年といへば、既に數へ年にては十五才に達したるものもあるべければ、是迚も同一院內に雜居せしむるは不都合なるべく少くも二種類位に區分するの必要あるべし。又彼等は規律を好まず、較もすれば逃走するの特質あり、若し十三才未滿の未犯罪者のみならば、嚴しく逃走を防ぐの構造なくも左程の困難はなかるべけれども、若しも犯罪者も入れ、又十六年迄でも入るゝとすれば逃走を防ぐの構造も自ら堅固を要し、費用も隨て多分を要すべし。メットライの感化院の如きは、毫も逃走を防ぐの構造なくして、而も逃走するものなしと聞く、是非常に偉大なる感化力を有したる人之に當り、完全無缺の方法によりて常に彼等に快樂を感せしむるの手段あるものと見ゆ。斯の如き感化力を有するものは、容易に得ざるを以て、矢張逃走を防ぐの用意なき時は一人逃るれば他の逃走心を誘起し、殆ど底止する所なき困難を見るべきなり。

若し又收容兒を十年以下に止るとすれば、感化力は頗る容易なるべし。又年一年に成長すれども、始め一二年間は炊事掃除其他萬般の事を自治せしむる事能はざるを以て、自然保母雇人等割合多數に要する事あるべし。若し又十三年までも入るゝとすれば、多少は自治を行ひ得る事も出來べければ、幾分か費用の點にも關係する所あるべし。

次に設置すべき土地の狀況も、亦種々の點に關係あるべし。即ち都會の中央に置く歟、都會中の邊地に置く歟、又は島地或は山間僻地に置く歟等是なり。元來人心を誘惑するの多きは、都會より甚しきものあらざれば、感化事業は之を都會の地に起すとするも、成るべく邊地を可とし、都會の邊地よりは寧ろ山間僻地か、島地抔は總ての點に於て最も有効なるべし。而して設くべき土地の狀態に依りては、設備の點に於ても感化の點に於ても教育方法の點例へば手工とか農業とか、漁業とかを云ふに於ても大關係ありて、自然費用の上にも大なる差違を生する事なるべしと信ず。

終りに少しく枝葉に屬すれども、猶注意すべき事あり。多數の人を收容する院の事なれば、家屋の構造は最も忽緒に附すべからざる事是なり家屋は先づ南面せしむるを要す。然らずんば冬期には寒氣甚しく夏期には炎熱に苦む事多かるべし。又梁間は必らず四間以內に止め內一間を南面の椽側とし、南面全部硝子障子、又は障子とし、北側も亦總窓とし、窓下に掃出し口數ヶ所を設け風の方向に依り、南北何れへも塵埃を掃き出すの便に供する事も心得べし。又鳴居の上には二尺位の廻轉窓を、柱と柱の間每に付し、出來得る限り光線の射入と空氣の流通とを充分ならしめざるべからず。如何なる人にても居所の如何に依り、空氣の清濁に依り心身に多大の關係を及ぼすは、自然の理にて、特に孤兒、浮浪兒、又は不良の傾向ある兒童を多數に置くべき場所にてはば、右の設備は一層の注意を要せざれは、感化上障害を及ぼす事少なからざるべし。其他種々必要の事項あるべきも、思ひ出るまゝ、二三を記せるのみ。若し參考の一助とも成らば幸甚し。

社會

現在の政界

現在の政界、一言にして之を云へば曰く混沌たるのみ、伊藤內閣の瓦解より今日に至る迄、四週餘日を經過するも未だ後繼者の定るなし、此間所謂元老會議なるもの幾度か開かれし

も一の結果の見るべきなし、山縣侯起たず、松方伯起たず、西郷侯逃れ、井上伯起たんとして俄に腰を折り、政界の難局以て知るべしと雖も、内外多事の今日決して喜ぶべき事にあらざるなり

或は云ふ伊藤侯再び起つべしと、然らざれば臨時首相の西園寺侯遂に永久の總理たるべしと、稿成るの時偶〻新紙報あり、大命桂大將に下れりと、果して事實ならば内閣の組織も愈〻近きにあらむか、吾人は速に其成立せられんことを望む

社會民主黨の禁止

前號本誌に於て社會黨出づべきことを記しぬ、果して彼等は内務省に結社を届け出ると共に宣言幷に綱領を發表せり、而して彼等の宣言や、綱領や治安に妨害ありとして遂に禁止の鐵槌を下されぬ、彼等の遺憾怨ふべしと雖も是非なき事也

大菩提會の窮境

佛骨奉迎紀念の爲め起りし大菩提會は、教育、慈善事業等の少からざる抱負を以て生れたるにも拘らず、未だ何等の着手せるを聞かざる中に早くも、負債の爲め轉た困頓を極め非常の窮境に沈みつゝありと云ふ、信か僞か、若し信なりとせば吾人は同會の爲め之を悲しまざるを得ず、同會の如きは一宗一派の手によりて起れるにあらずして、所謂各宗共同一致の結果によりて成れるもの、同會の浮沈は實に各宗の面目に關するや甚だ大なりと云はざるべからず、一言を寄せて同會委員諸氏の猛省を促す

四恩瓜生會の大會

四恩瓜生會の大會は去月廿六日神田錦輝館に於て大會を開きぬ、會者無慮千三百餘名と註せられ、傍聽者の過半は婦人を以て埋められ、珍しき大會なりき、初め安達憲忠氏開會の趣旨を述べ、次て柵橋絢子、下田歌子、村上專精師、島地默雷師等の演說、餘興として箏、空也念佛等ありて非常の盛會なりし、試に空也上人の御和讃を掲けて未知の人に紹介せん

長夜のねふりは獨り覺め
五更の夢にぞおどろきて
靜に浮世を思すれば
僅に刹那の程ぞかし
時候程なく移り來て
五更の天にぞなりにける
念々無常のわが命
何日生死に陷されむ
人命無常停まらず
山水よりもはなはだし
僅に今日までたもてども
明日の命は期しがたし
三界處ひろけれど
來りて留まる所なし
四生の形は多けれど
生じて死せざる躰もなし
三界すべて無常なり
四生何れも幻化なり
此中にすむ人はみな
譬へば夢にぞ似たりける
東蓮前後の夕煙り
昨日霞鍵今日も作立
北芒朝暮の草の露
後れ前きだちためしあり

故瓜生刀自の銅像除幕式

瓜生刀自の銅像建設の事は兼てきゝつるが、愈〻去る四月十九日を以て除幕式を行ひぬ、來會者四百人席定まりて委員長の挨拶に兼ねて、刀自の略歷談あり、來賓總代河野廣中氏の演說、終りて音樂の聲と共に除幕すれば刀自生前の音容彷彿として目前にあり、來會者一同拍手を以て之を迎ふ、こゝに遊行上人は三十餘人の僧侶に擁せられて丁重の供養讀經を爲し、暫時休憩の後、代りて淺草寺住職修多羅大僧正十餘人の僧侶を率ゐて、讀經供養、最後に瓜生家總代岩子刀自の孫祐二郎氏の挨拶ありて、式全く終る、

銅像は淺草公園水族館の右裏手にあり、

碑文は下田女子の撰にして如左

あゝ刀自は菩薩の化身なりき、刀自會津の鄙邑に生れて身は寡婦となれりき、然るに其功績の偉大なる枚擧に遑あらず、學校を建てゝ佛教を弘め、墮胎の惡風を一掃し、育兒會を起し、病院を設けて幾多の窮民を救ひ、或は兵士を慰み、戰死者の遺族を慰め、或は廢物利用の法を工夫して、世を益するなど刀自の一生は殆んど弊風惡習のわざに盡し了りぬ、されば官よりも屢〻賞せられ、殊に勅定の藍綬褒章をも賜はれり、明治三十年四月齡六十九にして逝きぬ、然れども其善行美跡は長へに不朽の紀念碑たらん

正五位下田歌子撰　土肥直康書

地方教界の彙報

◎熊本佛教青年支部會　大日本佛教青年會熊本支部の主催せる第五回釋尊降誕奉祝會は去月十二日午後一時より市内坪井淨行寺に於て擧行せられしが第五高等學校を始め市内の各學校に散在せる會員及び一般の傍聽者無慮二千名にして始に清亮なる音樂に和し莊嚴なる南無本師釋迦牟尼如來の聖幅前に進みて恭しく灌佛の式を爲し第一に山本亟誠氏の頌偈朗讀次に續有節氏の祝詞朗讀次に藤井專隨氏は東京より送附し來れる大日本佛教青年會幹事眞岡湛海氏の祝詞幷に在文科大學會員惣代村上龍英氏及在醫科大學會員惣代山口高三郎氏の祝詞を朗讀し尙鹿兒島佛教青年會其他各地より寄せ來れる祝電を讀み上げそれより直に演說に移り劈頭藤井專隨氏は壇に登り慷慨なる句調を以て開會の趣旨を述べ釋尊の降誕日は即ち吾人人類精神的生命の降誕日なりと叫び次に山隈敎遵氏は釋尊の降誕と我國躰との關係と題し地質學上より人類の起原を尋ね進んで世界宗教の起原に溯り轉じて印度宗教の四吠陀時代に入り釋尊降誕の當時宗教哲學の大勢を回顧し南北佛教傳播の形勢に及び我國の文學、美術、神道、倫理に對する佛教の感化を說明し遂に我國の悠久不變なる國躰の基礎は完全圓滿なる佛教眞理の擁護に依りて益々堅牢なりと斷定せり氏の演說は洵に理義明白なりき次に粟津大寂氏は佛は一切智人なりと題し大聲を揮ひ佛とは自覺覺他覺行具滿の義を有し自ら宇宙萬有の眞理を徹悟し貪瞋癡の煩惱を打破して天地間一切の智識を備へたるものなりとして之を經典に證し例を滑稽の俚諺に取りし縱橫に論じ自在に說き去り聽衆をして最も滿足を與へしめたり次に藤井氏は東京大日本佛教徒青年會本部より送致し來れる星月夜及び佛誕生會講式等都合四百餘部

を學生に配附する旨を告げ直に配附し終り奏樂止むと共に八淵蟠龍師は悠然壇に上り唯我獨尊なる題に就き滔々黄河を決するの概ある濁聲の雄辯を皷し一時四分に渡る大演說をなし深く滿場に感動を與へ最後に藤井氏閉會の旨を告げ來賓には茶菓の饗應あり會全く散せしは午後六時過なりしと云ふ

◎樹德會　千葉第一高等學校醫學部は今回改めて千葉醫學專門學校と改稱せられたるが、去二十六日は本學年終末の例會を開き、前田慧雲師及眞岡文學士出張、有益なる講演あり同縣高等女學校教諭小池民次氏其他醫學部教職員數名來聽せられ盛會を極めたり今回中山茂樹、金塚義衷、藥科開三の三氏新に委員に上任、一層同會のために盡力せらるべし

◎德風會　同會に於ては、國府精一、渡邊隆勝、江部淳心、小穴秀一、及清水の五氏、新に委員となり本學期より盡力せらる

◎竹村學次郎氏逝く　氏は千葉第一高等學校醫學部を卒業し、後米國に渡航し同國に於て開業し內外人の信用を博し、將來大に爲すあらんとせしに不幸にして二竪の爲に逝く、氏は長野縣上伊那郡中澤村の人、實に樹德會創立者の一人として、佛敎の爲に盡す所少からず、今や中途にして夭逝す誠に痛哭の情に堪へず

◎第三高等學校佛敎青年會　の近況に付同會委員森川智德氏より眞岡文學士に宛てたる私信なれども、同會の近況を知るに足るを以て左に之を揭ぐ

（前略）本會の隆替は殆本校の運命と伴ふが如く感せられ、本校に大學豫科再設せらるゝや奎運鴻昇の勢に連れられつゝ本會は一昨年已來漸く萎靡沈滯の悲境を蟬脫致候即ち本會は前幹事木部崎、江村（二人共御地大學在學）二君の盡力によりて其氣運を挽回致候二君は此點に於て本會の歷史上エポックメーキングの事業を果せしと申候て差支無之かと存じ候昨秋九月以來は小生等乍不及前二君の業を繼紹致候て如何にかして前二君の大功を空曠有無の裡に埋沒せしめざらんを期し本會の振はざらんを惟れ恐れて日も足らざるに幸に校內には山內、野々村、廻野、榊諸文學士の鮮かならざる援助を受け校外よりは特に橋川惠順師の一方ならざる盡力に預り內外相應じて本會をして今日の盛況を呈せしめ申候、小生は何等の憶心もなく本會今日の狀態は本會の歷史が告ぐる最盛の時代なりと申候に躊躇すると無之候、現今會員其數百十四名に達し特に昨年九月來山內文學士の下に維摩の講莚を開始致候事は已に御承知の事と奉存候爾後猶これを繼續し會員の多くは熱心に聽講致居候恐らく今學年中には尠くとも維摩經の前半を終らんかと存じ居申候、

本年度の春期大會は彌去五日京極の金蓮寺にて開會致候先是小生等は當地の醫學校の諸氏と相提携致し連合大會を開かんかと存じ先方へ一應交涉致候ひしも先方には當年は不幸にして事情有之候由にて乃ち明年よりの提携を約束しつゝ今年は本會單獨の大會を開く事に決定致候、

彌去る五日午後一時半より開會仕候講師には第一藤島了穩師

「泰西の土產」と題して得意の快辯を弄せらるゝこと一時間餘り、第二江村秀山師「三大敎誡」の題下例の諧謔好笑の言もて巧に聽衆を動かされ、第三廣陵了賢師「佛敎は學ふ可きものに非ず」とて實行的方面の佛敎を皷吹せられ、第四文學士朝永三十郎氏「人格中心の實踐主義」を述べらる此間の「精神界」に同學士の御寄稿被成しものと大差無之候隨分立派なる御說と感心仕候最後に山內文學士の「平等と差別」は大に聽衆の耳目を惹き申候同學士の流るゝが如き快辯と豐富なる頭腦とは將來學士をして我佛敎界有數の大辯士たらしむるに足らむかと生意氣ながら評論がましく存じ居候、聽衆は凡て五百名計り一般へ「坐禪法語」てふ別本施與致候、同書御送付申上候間御一讀被成下度候

本會も力の及ばん限り益隆盛に致度と存じ小生等の後繼者たる可き人々と其策を講じつゝ有之候（後略）

雜錄

伯林通信　日本花祭

（四月八日、釋尊降誕會）

（在伯林）近角常觀

三月末日四月一日の交伯林在留の日本人の間に議あり曰く、四月八日佛誕生の日を卜して日本國民古來の習慣たる花祭を行ひ、日本に同情を寄せ佛敎に嗜好を有する西人を招きて其喜を分つこと、恰も彼が耶蘇降誕祭に於て其歡を吾人に頒つが如くせば、或は東西民族相互の禮讓に於て相備るのみならず、西人の腦裡容易に東亞を領解するの一助たるを得むと、議忽ち傳はり、甲唱乙和、二日直ちに發起人會は開かれ、三日既に發起人署名の招待狀は四方に頒たれたり、紀念の爲め諸氏の名を記すること左の如し

文學士姉崎正治、文學士近角常觀、文學士藤代禎輔、文學士芳賀矢一、池山榮吉、東洋語學校教授巖谷季雄、海軍主計少監鎭田重一、法學士倉知鐵吉、文學博士松本文三郎、農學士松村松年、法學士美濃部達吉、醫學士宮本淑、森孝三陸軍大佐長岡外史、文學士薗田宗惠、玉井喜作、伯爵津軽英麿、文學士吉田靜致

三十有餘の新聞紙は爭て之が報道を傳へ、日夜出席を請ふもの踵を接す、事益〻豫想より大にして、結果を憂ふること益〻甚だし、蓋し言語を異にし、宗敎を異にし、風俗を異にする歐洲の大首府にありて、而も其異點を發表して而も明晰なる領解を得、圓滿なる結果を收めむと擬す、至難の業と謂つべし、而して結果は良好なる成績を齎らし、意外なる成功を告げたり、從來の日本同情者は非常の滿足を以て其好意を謝し、未だ日本を熟知せざりし人は益〻尊敬の念を起せり、吾人は茲に徒に自ら謳歌の筆を弄するを止めて寧ろ當地諸新聞の記事と評論とを拔萃して報道に代えむとす是如何に西人が理解せるかを知るの便あればなり曰く

吾人基督敎徒が復活祭を以て吾人開宗者の苦難歷史の紀念日としてのみならず、永き淋しき冬を送りて春の再生せる祭として祝するが如く、亦日本に於ける佛敎徒は花祭を以て其開

宗者たる佛陀の紀念としてのみならず、春の祭として之を祝するなり、何んとなれば百花爛熳たる春の眞中に於て彼の覺者佛陀は此世界に降誕したればなり

昨夜 Hofelo Vier Inhvesgeiten (四季樓)——實に此名たるや長崎に於ける旅館に於て日本文字を以て書かれつゝあるかの感を生せしむ——の大室に於て彼の詩的に云はゝ花の祭猶一層進みて宗教的に云はゝ佛陀降誕祭は現時伯林滯在の日本人によりて今年初めて祭日とし執行し壁められたり

大室の横壁には高く爛熳たる花を以て蔽はれ、赤黄白褐實に春の色を一室の中に鐘めたり（嗚呼此の地に在りては本國と異りて暖室によりて作られたる春たるなり）而して此百花爛熳の中に於て、綠滴らむとする棕櫚、愛らしき青葉の間に、絹を以て蔽はれたる卓上、一の花御堂は建てられ、其柱や其屋や躑躅花若くは椿花を以て巧みに飾られたり、而して其中に小なる佛陀の愛らしき銅像を包めり、而して嚴肅なる法服を纏ひたる僧侶二名亦是に列席せり、此小なる佛像は實に誕生祭の爲めに用ひらるゝものにして（實に清淨無垢其容も亦全く嬰兒の形をなし、如何に頑固なる耶蘇教僧侶と雖も之に對して異論を挾むべき餘地を知らざる也

多くの日本人は歐服に代ふるに日本服着物を以てし何れも獨逸の友人に對して温和柔かき愛すべき而も嚴かなる鄭重を以て接待したり、出席の伯林人中には東洋風の模樣を着し、菊花を挾みて耳飾とし、又日本絹を纏へるものもありし、之を要するに何れも互によく調子相協ひて最も領解せむことを勉めたり、而して當日來會せし多數の人々の中佛教の何たるか又此祭の意味の何たるかを知れる人々は實に少數に過ぎざりしに當日演說者の莊重なる談話は遂に無頓着なる賓客をして耳を傾けしむるに至れり

既にして嘲哳として音樂起り、一座頗る靜まりたる頃大佐長岡外史氏は起てり、大佐の襟には諸種の勳章赫けり、氏は來賓に對して親しき切なる挨拶をなし且つ日本語を以て一場の演說を試みたり、而して判事ブロスト氏は大佐の演說を獨譯せり、曰く日本に於ては西暦五百五十年頃佛教渡來して已來久しく國民の道德を涵養し、心量を感化し、今日にありては其本國よりも寧ろ日本に於て其精華を鐘め、日本佛教として特性を有するに至れり、而して日本が輓近泰西の文化を輸入して、容易に十分之を消化するの能力を有する所以のものは數百年來既に地鑑を耕したる結果によらずむばあらず、かく云へばとて此會の目的が歐洲に向て佛教を擴張する爲にはあらず、唯吾人日本人が此が爲めに如何に幸福なるやを喜び、此時に際して唯諸君の賁臨を請ひたるに外ならず、猶此已上の目的ありとすれば、獨逸及日本の兩國人が益〻親密にして互に國民的特性を容易に領解せしめむと欲するに外ならずと而してブロスト氏は猶進みて此會の必しも純宗教的ならざるを辯ずると同時に東洋事情を熟知し、既に日本に漫遊せる同氏は、佛教の道德上に及ぼせる所見を述べて曰く、佛教信者なるものは諸種の關係に於て思想若くは行爲何れも之を我西洋の習慣に比すれば一層理想的にして殊に其道德教訓か財產

所得に就て宏量なること日夜金錢收獲に齷齪する吾人の文化を以て殆むど想像し得べからざるものあり、且つ佛教の教理は諸種の形式の忠實、各自の勉勵、心靈の解脫を誨ふるものにして是確かに、吾人は獨り自己の道德觀念のみを絶對的に正確なりと臆斷すべきにあらずして、他の道德觀も時として吾人已上に出づることあるを說破するの教誡なり、吾人は既に熱心に勉勵し、智識ある、美術的なる、學術的なる高潔なる日本人民を尊敬することを知れり、故に吾人は此祭が獨逸に於て初めて大なる公に於て獨逸人及び日本人共に會合して執行せられたるを欣ぶ可き也、數年已前にありては恐らくは此の如きの祭を伯林に於て行ふことは不可能の事たりしならむ而して今日之が行はるゝ所以のものは時の進步の徵表にして、又獨逸帝國首府が繁華なる世界的都會たることを意味する證據なりと論じ、猶同樣にストラスブルヒ在留の日本人間に此の祭の執行せられたるを披露し同所及ウヰースバーデンより來れる祝電を朗讀し、最後に日本帝國及日本人の萬歲を唱へて壇を下れり

獨人に次で姉崎學士は此祭の歷史に就きて辨じ非常に感動を與へたり、彼は巧みなる獨逸語を語り一言一句聽者をして何の苦もなく其の思想を追ふを得せしめたり、彼は吾人の耶蘇復活祭が花祭と本年同時に有合せることを述べたり、而して時に於て相合するのみならず耶蘇復活祭は救世主の蘇生を祭るものにして此蘇生の爲めに人類の救濟及び解脫は來るものなり、而して佛教徒は同じく其教主誕生の時に當りて往昔解脫者の出現を祝するなり其出現の當時一手は天を指し一手は地を指し兩者の間救濟を持來さむことを示せり、爾來此祭印度支那を經て來り古來日本に於いて大に行はれ殊に輓近大學學生を初めとして青年學生間に行はるゝ事益〻盛なり、而して此誕生祭と彼の復活祭とは共に三冬嚴寒の氷結を脫して春光和融の世界の出生を示すものなり、而して此二者の祭の相合するもの決して偶然にあらざるなり、然れども彼は二者教理の異同に就きて語らむとするものにあらず、唯彼の花香花光の世界に充滿するを共に語らむと欲する也、其香や其光や宗派の異同を問はず職業の如何に拘らず古今東西共に喜び共に樂むを復べき也と

東洋語學校の巖谷季雄教授は獨語哲學者に次で詩人來れり、自作の詩的御伽譚を讀めり、其思想は躑躅嬢と椿嬢の二人が裸体なる小佛陀の爲めに衣を縫はむとし遂に之が報謝として永久花祭に向て爛熳として花發くを得ると云ふ妙想なり、實に是非凡なる天才、吾人は近時獨逸の詩人が其作を出すを見る、而して此日本人の技倆は確かに克く彼等に共に駢び騁するを得む、彼は愛すべき優美を以て要點を飾り詩想と諧謔を以て色を交へり、而して彼は如何にも無邪氣に行ひ小兒の如く愛すべくして遂に衆の心を奪へり、是實に日本着物きたる小說家なり、滿堂の喝采によりて彼は本來獨逸の詩人たること難からざることを證明したるの後、和獨會長ブルン學士は簡單に獨語を以て前句をなして日本語を話して漸く國の面目を保ち大に日本人の爲めに其鄕音を喜ば

れ、殊に列席せる二人の僧侶の賞讃を博せり、破顔微笑常に温容客に接したりし一人は益〻滿足の色を顯はし、眞面目なる容貌をなして此時まで一笑をも洩さゞりし他の一人も俄かに金の眼鏡を正して若き獨逸人を喝采せり

最後の演說は日本人に屬し、藤代學士は流暢完備なる獨語を用ひ、天賦の演說家たる學者的沈着を以て簡單なる演說を試みり以て貴婦人の爲に祝せり。彼は貴婦人を花祭と近き關係に持來し、且つ謝して日本國にありては此祭は殿堂の前百花爛熳たる青天の下に行はるゝを常とす、然れども當地北寒の所にありては未だ美花祭に供すべきもの頗る乏しく以て憾と爲す、然るに賴に貴婦人の出席を得て此祭を眞の意味に達せしむるを得たり、茲に聊か謝意を表するが爲めに花御堂の花飾を頒ち呈するを得むと、語々古詩を參掛し句々音調整ひ、其內容の美麗なる、其想構の巧妙なる聽者をして感嘆措く能はざらしむ彼は獨逸帝國の萬歲を唱へ滿堂相和せり

かくて此祭の眞面目なる部分は終りて今や愉快に相語り相親む、而して戸外には獨逸の春の祭として春雨アスバルトの街を打ち、內には花と燈の下に日本の春は赫けり

是實にベルリーネルターグブラット、クラヰネジヤーナル等の記載を拔萃したるもの、其他ポスト、モルゲンポスト等皆何れも口を極めて賞讃せざるなし、實に當夜の來賓內外四百人に下らず、陸海軍將校あり文官あり學者あり何れも皆頗る滿足を表し、日本を領解すること益々深きに至るは、吾人の密かに欣喜に堪へざる所なり

最後に一言缺く可からざるものあり、曰く此の如きの會合が海外在留の邦人によりて容易に成立し得る所以の者は其動機種々あるべしと雖も之を要するに國民自覺し時機熟したるの結果たらずむばあらず、而して獨り伯林のみならず獨のストラスブルヒ、米の桑港何れも同日同樣の會合ありしといふ、而して必ずや其他海外各所に此企ありて未だ吾人の耳にせざるもの多かるべし、而して遙に想ふ故國今や正に櫻花爛熳として六十餘州に開き遍からむとす、當日は大日本佛敎靑年會の第十回降誕會を初として全國各地の會合頗る盛大なりしもののあらむ、海外萬里同歡同喜の情を報ずること此の如し

附記

尙降誕會の景況に付て讀賣新聞は小波山人の通信を掲げたり左に摘要して轉載せむ

（記者識）

去る八日灌佛の日は、恰も當地の耶蘇復活祭に重り候まゝ、東西兩本願寺派遣の近角、關田の兩文學士を始め姉崎、芳賀、藤代文學士等の發企に成れる釋迦降誕會の世話人中に相加はり、思立ちは朔日の事にて、其間六日に事を大袈裟に致し、遂に會場をば當地風指の四季ホテルに定め、入場無料の案內狀を發し候ほどに、何かさて當地空前の盛、而も佛の誕生日と云ふ珍しさと、花祭の名の愛でたさと、餘興には舞踏有りとの面白さとに、さらでも物好なる赤髯の紳士、碧眼の淑女等先を爭ひて來り會する者約三百餘名、去年の和獨會のクリスマスの盛況に倍する賑ひを極め申候

此の夕の趣向は、まづ正面の壇上に三尺餘の御堂（諸種の花束にて飾れる）を據ゑ、其內に誕生佛の約八寸なるを安置し、此の兩側に關田、近角の二氏法衣を着けて控へたり、案內は午後八時にて、九時には場內立錐の地も無き迄に相成候へば、長岡陸軍大佐壇上に立ちて、故らに日本語をもて開會の趣意を述べ、次で姉崎文學士獨逸語をもて開會の緣起を說き、終りに藤代文學士は來賓の婦人に對して一場の挨拶あり、小生は其間に出でゝ此の會の爲に新作せるお伽噺一篇を朗讀致候次第に御座候、右は固より能文なる津輕但の添削を經たるものなれば、かゝる人中に吹聽致候てもまづは恥かしからぬものながら、さりとては聽面の無き加減、自分ながら近來敬服の餘に御座候

尙聽面の無きは之に此ちすして、此日小生の發企にて紀念特葉書を印刷せんと計り候處、時日迫りて間に合はず、途に大膽不敵にも直筆を揮ふことに致し、まだ習ひ立の頗る覺束無き水彩畫の粗筆を揮りて、百枚ばかり塗抹致し、之を當夜の賣物と致候處、始の程は彼是ひやかされ候ものゝ、御存じ玉井氏の口前にて、瞬く內に一枚も餘さず賣上の、合計金五十マルク也とは、何と張いかゞ、と申度、實に世界は廣いものに御座候

又此夜は姉崎氏、玉井氏、小生、其他の邦人にも日本服を着し候者少からず、爲に一段の光彩を添へ……候や否やは知るべからざるも、確に異彩を放ち申候へば、諸新聞、雜誌社より寫眞掛を派出致し候に付、此の週內の紙上に陸離たること〻被察候間、其節は御笑覽に供すべく存候

態くて式了りて後、御堂を飾りし花束を取つて來賓の婦人に頒ち、それより舞踏に移り候處、何がさて舞踏と來ては目の無い連中、委員等の疲れ果てゝ場隅の長椅子に噪ぎ居り候をも顧みず、踊りに踊り、跳れに跳れ、其の中入の息緩には甘茶にあらぬコヤヒに浮され、つぼれならぬルツ、ポルカを亂れ合ひ、黃金の髮は空に靡じ、白妙の裾は地に躍りて、嬌態必舞の花降りかゝる極樂淨土、かくては樣迦も基督も天上に手を把りて狂　喜せざるを得ざるべしと覺ヒ候

要するに右の花祭は俄の思付に成りし割には頗る好成績にて、之に由りて我邦の宗敎、風俗は元より、文學美術の一斑も都介被致候事と存候云々

信界

不諍の心

清澤滿之

爭鬪は惡るいことである、戰爭もよいことでない、然るに近來は競爭淘汰とか優勝劣敗とか云ふことが、善いことの樣に思はるゝではないか、而も其善いと云ふに就て、野蠻社會にも其事がありた、禽獸世界にも其事がありた、と野蠻社會禽獸世界の事が、其說明の根據とせらるゝではないか、人間の行爲を規定するに、其標準を禽獸世界に取るとは、不都合ではないか、或者は云ふ、競爭勝敗は必要のことである、シカシ其競爭勝敗の由る所のものは進化すゝ、腕力體力等の競爭が進化して權力智力等の競爭となる、故に文明社會の標準を野蠻社會や禽獸世界より取り來ると云ふことはなけれども、競爭と云ふことの必要は禽獸界と人間界とに通して必須欠くべからざることである、と、此說で見れば、競爭と云ふことは禽獸界にも人間界にも通して、只其競爭の種類が違ふ、禽獸界の競爭は劣等な競爭で、人間界の競爭は優等な競爭であると云ふので其要點は、競爭と云ふことが善であるか惡であるかと云ふにあらずして、競爭に優劣の差別があると云ふのである、畢竟進化論や文明論では、競爭と云ふことの善惡は判定しないのである、故に吾人が爭鬪は惡るいことである、戰爭は善いことでないと云ふに對して、進化論や文明論は全く無關係でなければならぬ。

然れば、競爭と云ふことの善惡は如何と云ふに、全體競爭と云ふことは、力の足らない人のすることである、充分相手に勝つ覺へのある人は、決して競爭と云ふ樣なことをしない充分なる力のある人は、如何なる極惡人をも憐憫して之を救濟する、故に極善人は極惡人と競爭すると云ふことはない、故に完全でないものでも、總体に善人は惡人と競爭すべきでない、或は善人と云はるゝ人が惡人と競爭する樣に見ゆることがあるも夫は憐憫の心より啓發誘導するのでありて、決して心底より敵對するのではない、若し其に敵對するのであれば、其人は善人ではなくて惡人であるのである、然れば、吾人は競爭と云ふことは、一般に惡るいことであると決着せねばならぬ

却説競爭は惡るいことであると云ふことは、明であるが、吾人は容易に競爭をやめることが出來るかドーか、吾人は容易に不諍の心に住することが出來るかドーか、吾人が愛だの慈悲だの同情だのと云ふことを思ふならば、吾人は其前に競爭を斥け不諍を進むるの心を養成せねばならぬではないか、愛だの慈悲だの同情だのゝ爲に競爭すると云ふは、譯の分らぬことである、自家撞着のことである、果してソーであれば、吾人にして若し競爭の念を生することある場合には、吾人は直に之を制服して其實行を遂げしめない樣にせねばならぬ、然れども、此は實際決して容易のことではない、他に敗けまいと云ふが、吾人の心性に固着したる惡習である、餘程修養を積みたる人でも、勝他の情を動かさぬと云ふことは、頗る困難である、功名富貴だの豪傑偉人だのと云ふ話は、動もすれは、勝他の情を養成する所の材料となるものである、吾人が眞に不諍の心に住するの必要を知りたる以上は、吾人は此等の話に就ても、頗る注意を要する次第である、功名富貴だの豪傑偉人だのと云ふ話は、決して無用の話ではない、シカシ若し夫が爭ひ求めて得なければならぬものと云ふならば、夫はツマラヌ話である、若し夫が爭はず求めずして來るものと云ふならば、夫は頗る有用な話である、眞正の功名富貴は決して競爭によりて得らるゝものでない、競爭によりて得られたものは、其競爭によりたことの爲めに、其ものが醜惡となる、不諍の心に住して事を爲せば、其不諍の心より出たる爲めに、其事が皆善美となる、競爭の情に驅らるゝものは、匹夫野人である、不諍の心に住するものは、豪傑偉人であると云ふて差間ない

抑競爭の情に驅らるゝのは、智慧が充分でないからである、楯の一面は金色であることは相違ないが、他の一面が銀色であることも間違ひはない、唯自分の目前に見ゆる一面のみの智慧を以て、他の一面の智慧を排斥せんとするから、紛爭を免かるゝことが出來ぬのである、世間の議論や說明に相違があり衝突があるのは、畢竟此と同樣である、而して議論や說明の相違衝突から實際の爭鬪や戰爭やが起りて來る、故に吾人が此世間に在りて、不諍の心に住せんとせば、吾人は二ッの方法の內其一を選ばねばならぬ、第一の方法は完全なる智慧に達するのである、吾人が完全なる智慧に達すれば、吾人は對敵萬物の妄情を脫却して萬物一体の眞理に安住することが出來る、吾人にして萬物一体の眞理に安住することを得れば、吾人は天地を以て我体とし萬物を以て我相とし、決して吾人に敵對する所の外物他人を見ぬ樣になる、故に吾人は常に不諍の心に安住することが出來る、然るに此は實際云ふには易くして行ふには甚だ難きことである、吾人の智慧は有限である、吾人は有限の智慧を基礎として不諍の心に安住せねばならぬ、有限の智慧を基礎として不諍の心に安住せんには、第二の方法を取らねばならぬ、其方法は如何と云ふに、吾人が自己の智慧を盡すも到底及ばざる所多きを確認するのである、吾人が眞個に我智慧の及ばざる所あるを確認する以上は吾人は決して吾人の所見を以て他人を降伏することを能はざることあるを許容せねばならぬのみならず吾人は他人の論說動作に對して、充分なる寬容主義を取らねばならぬ、而して充分なる寬容主義の實行は、他力無限を信じて充分なる滿足を感ずるものにあらずは、決して爲し能はざることである、第一の方法は吾人を無限大にして不諍の心に安住せしむるのであり、第二の方法は吾人を無限小にして不諍の心に安住せしむるのである

今昔

新山吹譚（承前）

甲南生

扇谷の管領上杉定正は道灌の主なり、嘗て禪僧萬里を招ぎて宴に陪せしむ、道灌また座にあり、酒三行灑く熱し氣昂ること萬丈道灌乃ち立ちて舞一番を演ず、萬里依りて一詩を賦して曰く

銀燭添光月漸圓　相州太守夜臨筵　春風袖暖婆々舞　旅鬢忘勞意欲仙

と殺氣四隣を罩めて凄風腥き六十餘州の天、雷關東の一角春風熙々の狀あり、眞乎に萬綠叢中の紅一點か、此夕定正道灌の第に到る萬里また從ふ始めて忍ぶ文字摺と奧州眞野の萱とを見て頗る珍とす、こは蓋し道灌の好奇遠く奧州より求め來りて珍藏せしもの京洛の人其名を耳にすること久しと雖ども未だ其實を見たることなかりしならんか、此の夕また歌の披講ありき萬里また賦して曰ふ

文字靡名剛忍言、始看眞野帶秋萱、和歌未絕人丸筍、披講聲中月一痕、

と只見る江戶城中の靜勝軒雅客相集りて詠を鬪はすの時、一團の皎月中天に懸り、品海の浪千里明かに松籟楚々として窓に入るもの、豈に宛然たる一幅の好畫圖に非ずや、清遊雅興彷彿眼にあり、

道灌はまた嘗て松福廉兩萬里等の諸僧を招きて畫舫を墨水の流に浮べ悠々以て雅懷を恣まゝにしたることなりき萬里また詩あり曰く

十里行舟浪自花　春遊不盡在天涯　隅田鷗亦應都鳥　皷吹晚來聲入霞

と墨水流れ緩やかにして白鷗眠濃かなるの邊一抹の晚霞坡塘を罩め漁歌悠々蘆荻を亘る、五百餘年の古に於ける隅田川豈氣富鳴り煤煙むせぶの殺風景あらんや、荒草離々たる武藏野の平野を縫へる墨水江上の舟遊は如何に幽邃なりけん、

この他靜勝軒の銘序詩等稱すべきもの甚だ多けれどもあまりにくだ〳〵しければ今は畧しつ、文學者としての道灌を紹介するに於て多く遺憾を見ざればなり、あはれ山吹の難題に奮勵して初めて意を文事に傾けるてふ俗說の取るに足らざるは今更にいふを要せざるべきか、新山吹譚を草す、

附　道灌の最後

政事家として將軍として將たまた戰國時代有數の文學者として優に異彩を足利季世史に印する彼れ道灌の最後は果して如

何なりしか、諸説紛紜として定め難く信憑すべきもの轉た尠きの感あり啻一言以て之を掩ふ慘憺の極といふべきか、今少しく諸種の史料を批判して得たるところを語らしめよ諸書に記するところ多少の差違ありと雖ども大約之を二説に歸するを得ん、甲の説を代表するものを五代記と爲す曰く

山の内扇谷の爭亂の起は太田道灌が所爲なりと山の内より沙汰し出して顯定太田を惡み給ふこと限なし道灌之を聞き多年の枌骨徒らに成て國家亂逆の張本といはれ口惜きことに思ひ主君に向て弓を引かんこと如何なれども仇を他に不可覓山内殿へ矢一ッ射て腹切らんと江戸河越の兩城を堅め其身は相州糟谷の舘に引籠る顯定年々扇谷を滅さんと思へども道灌があらん程は不可叶智謀勇才のものにて縱ば楚に范增あるが如し此度よき時節なりと定正の方へ以使兩上杉元來意恨なし云々この事の根源其張本を退治して國家の愁を安せんと存す御承引なきに於ては顯定甲を戴き軍門に命を落すも無力と申ける定正之をきゝ誠に關東靜治なることは兩家相守りて太平の政道を致すが故なり今矛盾に及て詩侍双方に分れ戰はゝ一方は必ず可亡他國この獘を伺はゝ上杉家忽ちに可亡事互に察し存ずるところなり然らば其張本を誅して兩家無私旨を散せんと返事せられける云云顯定太田道灌は自他の邪魔なり早く計り給へ此方には長尾を誅し騷動を靜候はんと被申しかば定正何の思案もなく長尾を打て被出候はゞ太田を誅すべしと定正この謀にのせられけることをうたてけれ云云

とこれと大同小異の説を爲すものを鎌倉管領九代記豆相記成氏軍記下りては續武家評林野史等となすこれによれば道灌の滅亡は山内の上杉顯定が陰謀にて扇谷を併せんとしまづ智謀の灌道を除かんとて若年なる定正を欺きたるに期するが如し第二説を代表するものを東亂記となし全然反對の原因を説くものあり東亂記に曰く

上杉家の出頭人評定の輩とも太田入道扇谷の執事として萬心に任せたるを猜み境に着ては吹毛の咎を爭て讒言しけること度々なり然れども扇谷との道灌なくては誰か天下の亂を靜むるものあるべきと他に異り思はれければ少々の咎を耳にもきゝ入れ給はず只佞人讒者の世を亂るべきをぞ悲み給ふ間道灌の出頭も嫉めづらかなり、かゝるところに道灌江戸河越の城を構へ其普請に心を勞め隙無かりしかば久しく出仕もせざりければ彼の讒臣どもよきひまなりと悦び道灌父子山内どのを退治すべき爲めに要害を構へる條無疑と申上ける間山内より此事を扇谷へ如何と談合ある定正大に驚き事誠なれば是一家不和の基國土亂逆の端たるべしと度々專使を下されしかは道灌父子嗟賢子不足與謀近年當家に無才庸愚のものも政務を爭ひ讒言眞を亂すなれば讒者の糺明もあるべからず只忠孝のもとに死を賜ひて衰老の尸を曝さんこと何の傷かあるべきとて兎角の陳謝に不及依之讒言しきりなりしかば云々

と、これと大同小異の説を爲すものを相州兵亂記結城戰場物語等となす是れによれば道灌、經營せし河越の城側に諭ゆるものあり讒口其間に乘じて主從の間を離間し道灌の頑とし

て之を改めざるに及びて遂に誅に遇ふといふにあり、今この二説の何れか最も眞に近きやを考へんに五代記の説は前後矛盾することあり且つ定正いかに若年なればとてなぜて斯く淺墓なる計略に陷るべきや史料としてみるも五代記の價値はいと〳〵少きものなり第二説は之に反して眞に近きが如しそは道灌の死後山内扇谷の兩家隙を生じ顯定高見原に出陣して定正を擊たんと計りし時の定正の長狀なるものを見るに實に次のごとき文あり

諸人の批判今度之一亂自身上事起候間治亂之沙汰おかしき樣に存する方も可有之事覺悟之前に候但太田道灌堅固成城壁山内可成不儀之企候間度々以專使加意見這般之事可爲存知候處誤歟如何云左傳云都城過百難國之害云々然者江河兩城如何堅固候とも山内へ不儀連續候者果不可叶候由申付候處不及承引剩思立誅亂候間勿令誅罰云云

と是によりて之を見る、道灌が河越江戸の兩城を修築すること當時の制に超へたるを以て、山内家まづ之を疑ひ必定山内を倒して扇谷の一家に管領の權を獨占せしめんとするものなりとし扇谷の主定正に迫りて道灌過大の兵備あるは兩家愈不和たるの基なるべしと告げたるを以て定正屢〻專使を遣はし道灌を誡めたるなりされど道灌は早く山内の陰謀あるを洞察し主家扇谷の爲めに計營せんとの志あり中〻に之に從ふの氣色なかりしに際し道灌の威權を妬む者讒を容れたるを以て遂に定正の毒手に倒るゝに至りしなるべし、東亂記に道灌のいへりしてふ詞あり曰く

山内殿大名なりと雖ども昌賢死去の後彼一流ども一人として善政を爲さず慾心熾盛にして云云國家の亂れんこと近かるべし然ば當方へ諸大名とも順府すべきこと疑なし如何にして名城を取り大勢を籠めんと宣ひける云云

これによりて見るも彼は早く已に禍亂の起るべきを察し山内の命運久しからずとなし江戸河越の兩城を固め關東の士心を結び一舉以て山内を倒さんと謀りしが如し不幸主定正その器にわらず姑息の策を用ひて僅かに一時の平和を兩家の間に保たんと欲し遂に重代の功臣を誅するに至る道灌已に誅せられて扇谷また一人の名臣なく顯定の陰謀をして遂に其成るを告げしめたるもの誠に千古の痛恨事といふべきなり、

道灌の死狀につきてもまた諸説紛々たるものあれど文明十八年七月廿六日定正道灌を糟谷の第に招き欺きて浴室に入らしめ刺客數輩をして之を浴中に刺さしむといふもの眞なるが如し時に年五十有五、

かゝる時さこそ命の惜からめ兼ねてなき身と思ひしらずばの詠を道灌の辭世なりといふは誤にてこは藤澤の役中根重頼の敵と戰ふて一美少年の首を馘し之を道灌に示したるときの詠たるなり

嗚呼道灌はげに治世の能臣といはんよりは寧ろ亂世の雄なるものか

(をはり)

會報

能登

◎佛教徒同盟會北陸支部

は去月五日を以て其發會式を能登國鹿島郡能登部村長樂寺(眞言宗)に於て擧行せり、農家は最繁忙の際なれども、來會者は無慮五百有餘に及びたり、東京の本部よりは本多辰次郎出張して午後二時頃到着せられし際には數本の煙火を打ち揚げ、數旒の旗を押立て　其行を盛にせり、式場門前には綠門を設け、國旗佛教旗を交叉し、裝飾最も壯重に出來たり、二時半頃オルガンの演奏と共に開會せられ、同會理事野田修氏發會の趣旨を述べ、次に會長孤峯白巖禪師(酒井村永光寺住職にして洞家の大德なり、見下越後地方巡教中にて當日は出席せられざりしは遺憾なり、)の告辭を堀觀澄師代讀せられ、次に本多氏は本部を代表して祝辭を述べ、次に同會理事田中久次郎氏祝詞を朗讀ありて後兩陛下の萬歲、同盟會の萬歲を唱へて、當日の式を了したり、次に佛教演說會を開く、演題と辯士は

社會の變遷と佛教　藤澤正淳
同盟會の事業　藤澤正淳
道德實踐法　本多辰次郎

午後六時散會して、同會役員、地方僧侶及有志諸氏六十餘名にて茶話會を開き、又本多藤澤(正淳)二氏の席上演說あり、又餘興として花火を打ち揚げ、同會助役の道上大藏氏は政教時報數十部を、寄附して來會者へ分配せられたり

七日午後越路村大字芹川泉福寺(眞宗)に於て同會大演說を開く當日は會役員の出席多かりしのみならず、聽衆も大堂に充滿して頗る盛會なりき、演者及び演題は

佛教不振の原因　堀觀澄
公同團体の不成立　本多辰次郎
報恩

なり、其他元平淳心氏も一席の演說を試みられ、又說教もありたり、

九日餘喜村大字下曾禰光源寺に於て、演說會を開く、是亦最盛會にして滿堂立錐の地なき有樣なりき、扨演題は

開會の趣意　堀觀澄
明治佛教史　藤澤正淳
佛教の變遷　本多辰次郎

閉會後茶話會を開く、席上本多氏及鹿島路村々長三宅藤造、醫師北野景勝、藤澤正淳諸氏の席上演說ありたり、席に列せる者五十餘名なりし、猶同會の役員姓名を得たれば左に之を掲ぐ、

會長孤峯白巖、永光寺住職禪宗、副會長眞宗成田祐慶、横山慶英、理事八名　手捲賢意、八野田興三右門、戸部恒雄、野田脩、元平淳心、田中久次郎、水口平內、笹川嘉四郎

其他顧問二十四名　評議委員數十名

大日本佛教同盟會北陸支部　會員申込者へ注意ノ概要

第一項　本會ハ本部ノ主義綱領ヲ贊同シ佛教時事問題ニ付臨機ノ活動ヲ爲ス事

第二項　本會員タルモノハ我國佛教界ノ各種團體或ハ佛教上ノ集會場ヘ出席及各宗本山等ヘ巡講ノ場合ハ相當ノ待遇ヲ與フルヿニ本會ヨリ勸メ申込ミ置クヿ

第三項　會員ハ左ノ種別トシ各會員證ヲ附與スルヿ

一　名譽會員(佛教上學識經驗實蹟著アル者ヨリ推薦ノヿ)
一　特別會員(一時金貳圓以上出金ノヿ)
一　正會員(一時金壹圓以上出金ノヿ)
一　普通會員(一時金五十錢以上出金ノヿ)
一　贊助員(何程ニモテ金錢物品ヲ喜捨スルヿ)

本會員二百名以上トナリタルトキハ支部發會式擧行ノヿ

◎德田佛教徒同盟會

本多氏は佛教徒同盟會北陸支部發會式に臨みたる序を以て、同會に招請せられて、德田村大字飯川の願聽寺に於て演說せり、同會は同村の富豪堀岡萬吉氏會長となり、副會長は同林貞次郎氏あり、當日は例年同寺に於て釋尊降誕會を開く五月八日(土地の狀況によりて每年

一ヶ月後れて執行するなり)なりしを以て、之を兼ねて同盟會主義擴張演說を開きしなり、寺門の前には綠門を設け、球燈を吊り、旌旗を押立つる等、裝飾壯麗を盡せり、參聽者も亦最多數にして堂に溢れたり、當日の演題と辯士は

開會の趣意　林貞次郎
王法論　藤澤正淳
佛教者の注意　藤澤正淳
民心の結合　本多辰次郎

なりき、此度終始最幹旋の勞を取られたるは、道上大藏氏なりき、是本會が殊に深く感謝する所なり、

一金四拾錢　三河都築義諦殿

累計金二百六圓四拾八錢

右本會基本金の中へ御寄附を辱うし感謝の至りに堪へす候　茲に謹て謝意を表し候也

第十回釋尊降誕會寄附金領收廣告(第二回)

一金武拾圓　早稻田專門學校內政友會

內金五圓大隈伯、金武圓大草慧實君、金壹圓梶井研丸君、金壹圓大內暢三君、金壹圓柏原文郎君、金壹圓岩堀智道君、金五十錢蕪城慧順君、金五十錢佐藤勇吉君、金八圓教友會々員諸君

哲學館內有志諸君

一金十八圓二十五錢

一金武拾六圓拾錢(第一回分)

東京帝國大學學及第一高等校內德風會

內金五十錢づゝ佐伯惠眼君、源良澄君、古川義夫君、高田儀光君、新保德壽君、澤野祖夫君、村山龍英君、西山榮久君、西崎憲英君、矢鳴頑山君、高原操君、山川眞純君、龜山正賢君、小笠原貫成君、羽賀義暢君、泉道雄君、芝田徹心君、伊藤元羊君、金六十五錢手塚光貴君、金拾參圓二十錢第一高等學校內有志諸君、金壹圓七十五錢其他有志諸君　以下次號

●再版廣告●

文學士　清澤滿之師序
文學士　近角常觀君著

信仰の餘瀝

全一冊　寸珍美本　紙數百頁餘

▲定價一冊金拾錢郵稅貳錢郵劵代用一割增

右初版賣り盡し候爲め暫く需に應しかね申候處今般再版出來候に付陸續御注文あらむことを希上候

六月　大日本佛教徒同盟會出版部

曹洞宗管長森田悟由禪師題　玄堂居士著

佛教極致　**和文涅槃經**　定價郵稅共
靈魂不滅　金六十五錢

記憶備用倶舍唯識起信論和文表解　全金九十錢

右の經論を讀まざれば佛教以て語るに足らず勿驚本書は古今未會有の新案的和文解釋なれば何人も易解掌中を見が如く僅時日少費用而も大部徹見とは數倍優等の功を有す飲て其味を知り玉へ部數有限

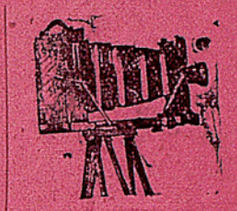
六月廿五日迄三割引此廣告添申込一割引五部以上尙一割引

發行所　京都新烏丸通竹屋町上ル　光風軒

政教時報第五十六號毎月二回一日十五日發行
明治三十一年十二月二十六日逓信省第三種郵便物認可
明治三十四年六月一日發兒

●寫眞は趣味あり尠なくも身體を健全にす●

寫眞器械



●素人用
●營業用
●學術用
●旅行用

新形舶來品々

正價 附屬品悉皆相添へ壹組金貳圓より參百圓迄

素人 如何なると雖も直に撮影し得る使用書添付す

開業 を望む者無料教授す

注文方 御來車の方實驗に供す

遠國 は小包にて送荷す

定價雛形目錄書 郵券貳錢で送る

東京神田區裏神保町六番地九段大通

寫眞器械問屋 ⊕ **東京芙蓉館**

（電話本局二千四百七十八番）

●●◎請必讀◎●●

村上博士講演集

村上博士手翰○文林閣編纂●○定價金貳十五錢○郵稅四錢

○一冊○百七十餘頁○製本美麗

本書は學德一世に高き帝國大學講師文學博士村上專精氏が、年來各所に於て講話せられたるもの又は公會の席上に於て演說せられたる雄篇を編纂したる者なれば、如何に有益にして各宗僧俗若くは學生諸君が必讀の珍籍たるとは、改めて贅辯を費すに及ばざる事なるべし●就中佛教道德の要旨●佛教の大意●二十世紀の宗教等の諸講演の如きは博士が最も意を注かれたる者●佛教の過去及び將來の演說の如きは滔々數萬言慷慨痛烈聽く者をして聲を呑み涙を抑へしめたる大演說たりしことは江湖の記憶する所なるべし●宗教と教育●宗教と學術との關係の演說の如き何れか必讀の珍篇たらざる○斯の如き諸篇は悉く錄して本集にあり冀くは競ふて愛讀の榮を賜へ●佛教の大意……●佛教道德の要旨……●佛教無我說……●禪と念佛……●予が佛教の觀念……●釋尊を憶ふ……●歷史上の釋迦佛……●佛教の過去及び將來……●宗教と學術との關係……●宗教と教育との關係……●人性は如何なる者か……●二十世紀の宗教……

來る六月十日迄に購讀する者に限り **特別減價** 一部郵稅とも **金貳拾五錢** 郵券代用は途中紛失の恐あり可成代金は小爲替を以て御送附あらんことを祈る

東京芝西久保巴町四十九番地

●發行所 文林閣